

繊細かつ鋼鉄のピアノニズム 怒涛の超絶技巧に驚嘆!!

川島基(p)によるストラヴィンスキー(G・アゴスティニ編)のバレエ《火の鳥》、他の登場



ストラヴィンスキー(G・アゴスティニ編)：バレエ《火の鳥》より《魔王の踊り》、《子守歌》、ハチヤトウリアン(M・キャメロン編)：バレエ《スバルタクス》より《アダージョ》、プロコフィエフ：《ロメオとジュリエット》からの《10の小品》より第4、6～8、10曲、フェアリヤ：《三角帽子》より《3つのダンス》、他
川島基(p)
〈録音：2010年7.8月〉
[HEART'S HC0002]

Daisuke Hirose 広瀬大介

難曲への果敢な取り組み。
安定した打鍵の妙

このCDを再生した途端、その大音響におもわず仰け反った。劈頭を飾るのは、アルバムのタイトルともなっているストラヴィンスキー《火の鳥》。知る人ぞ知る、という存在であるイタリア人ピアノリスト、ゲイド・アゴスティニの編曲によるこの演奏は、あの《魔王の踊り》から始まっている。そう、最高音と最低音を同時に最強音で打ち鳴らす、あの華やかな冒頭部。いま急速に注目を浴びてい

るピアノリスト、川島基の3枚目のアルバムは、この《火の鳥》をはじめとしたバレエ作品の独奏ピアノ編曲集である。

山下学氏のライナー・ノーツに拠れば、この録音にあたって川島が使ったペヒシユタインについて「音の反応の速さ、個々の独立した音色のシンフォニックな響きを十分に引き出すために」使われたとのこと。ちょっとした打鍵にも鋭く反応するよう、隅々まで調整された、敏感に反応する楽器を扱うということは、プロの料理人が切れ味鋭い刺身包丁を使うような

もの、あるいはプロドライバーがF1カーに乗るようなもの、と喩えられようか。

いわば、プロ中のプロにしか扱えないような道具を用いて、川島は果敢にストラヴィンスキーの世界へと切り込んでいく。アゴステイの編曲は実に緻密であり、オーケストラ用の総譜を見ながら聴けば、独奏ピアノ用の曲としては過剰なほどの音が詰め込まれていることがわかる。原曲がこれほど有名にもかかわらず、この編曲の知名度が低いのは、要するに「難しすぎる」のだ。川島はそんな音の海の中へ果敢に飛び込み、その首根っこを押さえ、音楽を力業でねじ伏せる。オクターヴ以上の音程を跳躍しても打鍵の安定感は抜群。何段階もある強弱のレヴェルも、指先の繊細な感覚ですべて管理下に置かれている。強靱な和音の連打、頻出するグリッサンド、ここで繰り上げられる超絶技巧、そのなにもかもに驚嘆せずにはいられない。

注目のフェアリヤ演奏。
濃厚な質感の華やかさ!!

ハチヤトウリアン《スバルタクス》より《アダージョ》、あるいは

はプロコフィエフ《ロメオとジュリエット》からの《10の小品》(収録曲は《モンタギュー家とキャピレット家》など5曲)にも、行き届いた繊細さと鋼鉄のごとき強靱さが共存していることは言うまでもない。そして読者諸賢には、是非フェアリヤ《三角帽子》より《3つのダンス》の音楽作りに注目されたい。それまでの20世紀ロシア・モダンニズムの冷やかさからは一転し、このフェアリヤには、スペインの雰囲気濃厚に漂わせる華やかさが音楽に宿るのがはつきりと感じられる。単に器用に指が回るだけでなく、その怒涛のごとき超絶技巧の中から、はつきりと色彩を伴った、質感のある音楽が立ち上る瞬間が訪れるのを聴くのは、そうあることではない。最後に置かれたのは、ピアノリスト自らが執筆する曲目解説でも「本デイスカの『アンコール・ピース』と位置づけるドリープの《コッペリア》より《ワルツ》。この口直しがあるお蔭で、1枚のCDが起承転結を伴った物語として完結する。そのセンスと強靱なピアノニズムを磨き続けられ、川島基がこれからの音楽界で一頭地を抜く存在になるのは間違いない。